

松浦佐用姫に関連する諸々のこと（1/2）

～佐用姫のイメージは・日本最初の仏教伝来の地、松浦
・もう一つの佐代姫終焉の地、浦ノ崎・松浦佐用姫、人々のとらえ方～

■日本最初の仏教伝来の地、松浦

狭手彦は、『日本書記』（720年）によれば、537年と562年の2回渡鮮している。勿論、佐用姫との話は、537年の第1回目の時のことである。教科書では、日本への仏教伝来は、538年である。これは、百済の聖明（せいめい）王が大和朝廷に仏像と経典を奉ったのを公式としている。それで、その前年、つまり537年に狭手彦は出陣し、10カ月後に帰国している。百済では、佐用姫が亡くなったことを知り、まだ、倭人には当時未知なる新思想である「仏教と仏像」が死者の霊を鎮めるということを聞き、聖明王にお願いし、亡き佐用姫のために仏像を作ってもらい読経法要をしてもらったという。

そして、後日、狭手彦は、大和への帰路松浦川の鏡山山麓の赤水（あかみず）に立ち寄り、この地に祠をたて佐用姫の仏像を安置したと伝承されている。この仏像は、観音像であるが、時代は下り、何時のころからか赤水観音堂は無住となり堂宇が荒廃したため、このさまを憂いた時の恵日寺の和尚さんが、観音像を当寺に移し安置し今日に至っている。このようなことでなら、松浦の地が日本最初の仏教伝来の地と言えよう。

■もう一つの佐代姫終焉の地、浦ノ崎

前の方で述べたように、南北朝末期には佐用姫は石と化するのだが、佐用姫のその後については、まだまだ幾つかの伝承が各地にある。その中の一つを紹介する。

それは、佐用姫が狭手彦の軍船を追い鏡山を下って浜崎より小舟に乗ってあとを追うが、嵐にあい命果て伊万里の浦ノに流れ着く。そこで、土地の人々は、懇ろに弔う。そして、狭手彦は、佐用姫のために仏像まで持ち帰っている。

そんなことから、そこでは、現在、伊万里市山代町立岩字佐代田原433番地、社会保険病院内に、佐代姫塚と佐代姫神社があり、地区の氏子さん達が管理し、毎年祭祀も行われている。地区の人は、「未婚の人には、縁結びの神様として、既婚の人には、家内安全の神様として」、信仰も厚い。

～2/2へつづく～

分野 歴史

地域 全域

◎地図・写真・統計資料など

◎引用・参考文献（出典）

- ◆『松浦佐用姫と大伴狭手彦』荻野忠行 P58
- ◆『松浦と万葉』清水静男著
- ◆『九州の萬葉』福田良輔編

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

	分野	歴史
	地域	全域
<p style="text-align: center;">松浦佐用姫に関連する諸々のこと (2/2)</p> <p style="text-align: center;">～佐用姫のイメージは・日本最初の仏教伝来の地、松浦 ・もう一つの佐代姫終焉の地、浦ノ崎・松浦佐用姫、人々のとらえ方～</p>	◎地図・写真・統計資料など	
<p>～1/2からつづく～</p> <p>■松浦佐用姫、人々のとらえ方</p> <p>今まで述べたように、松浦佐用姫像については、それぞれの時代によって、また、それぞれの地域によって多少違っている。</p> <p>1つは、悲恋のヒロイン像 2つは、おそろしい蛇神伝説像 3つは、石になった化石伝説像 4つは、戦時中の貞女の鑑としての像 5つは、浦ノ崎にみられるような純愛像、等々。</p> <p>さて、みなさんの佐用姫像は、如何に。</p>	◎引用・参考文献（出典）	
◎エピソード・伝承・うんちく など	◎もっと詳しく知りたい方は	
<p>■唐津市鏡、赤水（あかみず）観音堂・恵日寺・伊万里市浦ノ崎佐代姫神社</p>	<p>唐津市近代図書館へ お問い合わせください。</p> <p>■電話：0955-72-3467</p> <p>■ホームページ： http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html</p>	